



埼玉県のマスコット コバトン

ライブ・レター
Lib. Letter

2014 April [3～5月]季刊

平成26年3月4日 通巻 第35号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

黒田官兵衛

— 5つの名前を持つ男 —

開催期間 : 平成26年3月4日(火)～5月22日(木)

場 所 : 埼玉県立熊谷図書館2階ロビー

戦国時代から江戸時代前期にかけての武将であり、豊臣秀吉の軍師としても有名な黒田官兵衛。しかし、図書館で「黒田官兵衛」と検索しても該当する資料があまりでてこなかった経験はないでしょうか。

これは黒田官兵衛の資料が少ないからではなく、「官兵衛」という名前は、彼が名乗っていた名前の一つであり、他にも黒田官兵衛は様々な名前を名乗っていたからなのです。



今回の展示では、様々な名前を名乗っていた黒田官兵衛の「名前」にスポットライトを当てて、その名前ごとに関連する資料を紹介しながら黒田官兵衛の人物像に迫っていきます。

※黒田官兵衛は様々な名前を名乗っていますが、以下の記述では原則として表記を「黒田官兵衛」に統一しました。

1 通り名「官兵衛」(幼名「万吉」) ～人となり～

まず、「官兵衛」。この名前はNHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」としても聞く通り、黒田官兵衛という人物を指す名前としては最も有名だと思います。そして、この「官兵衛」という名前は戦国時代において、彼の通り名でした。

通り名である「官兵衛」を使い始めたのは、元服をしたのちといわれています。しかし、この「官兵衛」こそ、現代においても黒田官兵衛という人物を表すうえで最も周知

されている名前であり、このコーナーでは「黒田官兵衛」の生涯や伝記、人柄について関連のある資料を紹介していきます。

和暦	齢	関係事項
天文15年(1546)	1	11月29日に姫路城主小寺職隆の嫡男として生まれる。幼名「万吉」
永禄5年(1562)	17	初陣、このころ元服し、通称を官兵衛、諱を「孝高」(小寺孝高)と改める
天正3年(1575)	30	主君小寺正職を説き、織田氏に従属することを決め、使いとして岐阜に赴く。
天正6年(1578)	33	有岡城に幽閉される。
天正7年(1579年)	34	有岡城の牢獄から救出される。このころ黒田姓(黒田孝高)に戻る。
天正8年(1580年)	35	居城を国府山城へ移し、1万石をあてがわれ大名となる。
天正12年頃(1585年頃)	38	キリスト教に帰依し、洗礼を受ける。(洗礼名:シメオン)
天正14年(1586年)	41	従五位下・勘解由次官に叙任される。
天正17年(1589年)	44	嫡男長政に家督を譲る。
文禄2年(1593年)	48	秀吉の勘気を蒙ったため剃髪し、「如水」を号す。
慶長9年(1604年)	59	3月20日、伏見の藩邸で没す。

～黒田官兵衛略年表～

黒田官兵衛も他の戦国武将たちと同じように、いくつかの逸話が残っています。その一つに

「信長、本能寺の変報 十年、秀吉は高松城を攻めて毛利の軍と対陣していたところに、六月三日子の刻(午後十二時)に、京都の長谷川宗仁から孝高のもとに飛脚がきて、信長の本能寺の変を告げた。孝高は飛脚にむかって「お前は、なんと早くきたことか。このことはけっして人に話してはならぬ」と堅く口止めして秀吉の前にて、その手紙を披露した。秀吉の悲しみは深かった。しばらくして「その飛脚がこのことを、万一人に語れば、それが敵に洩れ聞こえて都合が悪い。いそいで殺せ」と、命じた。孝高は心のうちに「この飛脚がわずか一日半で六十里(二百四十キロ)の道を馳せきたったということは、まさに天の使である。そのうえ殺すべき科もなく、逆に早くやってきた功ある者だ」と考えて、自分の陣に連れ帰り「このことは絶対人に語ってはならぬ」と制して、隠し置いた。このときのことだが、秀吉が、この信長の変を聞いて、まだ何ともことばにださぬうちに、孝高はするするとそばに進み寄って、秀吉の膝をほとほと打ち、にっこり笑いながら「君のご運が開かれる手はじめてでございますな。うまくなされませ。」といったという。このことがあってから、秀吉は孝高に心を許さなくなったということである。」(『名将言行録 下 (教育社新書)』岡谷繁実/原著 教育社 1980)

といったものがあります。この逸話に出てくる「孝高」は、黒田官兵衛のことで、黒田官兵衛が無益な殺生を控える考え方を持っている人物であるとともに、信長を失った直後にもかかわらず状況を分析し、主君に発破をかけるといった、冷静な側面がうかがい知れます。

また、ここでは(幼名「万吉」として)いますが、幼名というのは読んで字のとおりで、幼い時に名乗っていた名前のことです。この幼名「万吉」に関連して、黒田家の出自や家系、その当時住んでいた姫路城に関連する資料もあわせて紹介します。

名前の豆知識① 幼名

日本では、八世紀以前まで童名と成人名の区別はありませんでした。九世紀初頭に中国の命名法が移入された結果、誕生時につけた名をある時期に改めることが行われるようになり、十世紀までには、庶民にまで普及するようになります。童名は普通、成人の儀に際し、諱がつけられると捨てられました。

(参考文献:『国史大辞典 10』p223)

一般的に黒田官兵衛の出自は『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会 1984）や「黒田家譜」（『益軒全集 巻5』（貝原益軒／〔著〕 益軒全集刊行部 1911）収録）に記されているように、佐々木源氏の支族で、近江国伊香郡黒田村にあるといわれています。そして、黒田官兵衛の曾祖父にあたる高政の時代に近江国を出奔し備前福岡に移り住み、祖父にあたる重隆の時代に姫路に移住したといわれています。

しかし、近年では「莊巖寺本黒田家略系図」や「播磨古事」を根拠とした、兵庫県西脇市黒田庄町を黒田氏の出自とする説もあり、黒田官兵衛の出自に関してはまだまだわからないことが多いのが現状です。

このコーナーの展示資料

（図書資料）

- 『寛政重修諸家譜 第7』（続群書類従完成会 1984）[288.2/カ]
『益軒全集 巻5』（貝原益軒／〔著〕 益軒全集刊行部 1911）[リ121.54/キ]（浦和図書館所蔵）
『姫路城とその時代（兵庫県立歴史博物館特別展図録 no. 15）』（兵庫県立歴史博物館／編 1987）[R210.48/ヒ]
『姫路城史 上巻』（橋本政次／著 姫路城史刊行會 1952）[216/H38]
『日本城郭大系 12』（平井聖／〔ほか〕編集 新人物往来社 1981）[210.1/ニ]
『黒田如水（ミネルヴァ日本評伝選）』（小和田哲男／著 ミネルヴァ書房 2012）[289.1/カ046]
『黒田如水（福岡市文学館選書 1）』（福本日南／著 福岡市文学館 2013）[289.1/カ046]
『黒田如水（吉川英治人物選集）』（吉川英治／著 六興出版 1985）[BM913/ヨ]
『黒田如水（西日本人物誌 7）』（三浦明彦／著 西日本新聞社 1996）[289.1/ク]
『黒田如水のすべて』（安藤英男／編 新人物往来社 1992）[289.1/ク]
『黒田官兵衛（中公新書 2241）』（諏訪勝則／著 中央公論新社 2013）[289.1/カ046]
『黒田如水と二十五騎』（本山一城／著 村田書店 1984）[210.4/ク]
『名将言行録 下（教育社新書）』（岡谷繁実／原著 教育社 1980）[281/カ]
『定本名将言行録 中』（岡谷繁実／著 新人物往来社 1978）[281.08/カ]
『史籍集覧 第30冊』（近藤瓶城／原編 角田文衛, 五来重／編 臨川書店 1967）[210.08/シ]
『播磨灘物語 上』（司馬遼太郎／著 講談社 1975）[シ]（久喜図書館所蔵）
『播磨灘物語 中』（司馬遼太郎／著 講談社 1975）[シ]（久喜図書館所蔵）
『播磨灘物語 下』（司馬遼太郎／著 講談社 1975）[BM913/シハ]

（雑誌資料）

- 『潮 2000年11月号』（潮出版社）
『歴史研究 1988年1月号』（歴史研究会）
『歴史と旅 2001年9月号』（秋田書店）
『宝島. 別冊 2096（2013年12月19日）』（宝島社）

2 諱「孝高」 ～軍師の顔～

前述したように「官兵衛」を名乗り始めたのは、元服をしたのちといわれています。その際に、通り名とは別に正式名称である諱として名乗った名前がこのテーマ名でもある「孝高」という名前でした。そして、この元服前後には、黒田官兵衛にとっての初陣もありました。つまり、戦場にデビューしたのと同時に「孝高」という名前をもち、軍師としての道を歩んでいくのです。

ここでは軍師の道を歩んでいく黒田官兵衛に関連して、そもそも戦国時代における軍師とは一体どのような役割であったのか。また、その軍師としての黒田官兵衛の活躍とは、そして、他に戦国時代において軍師とよばれた武将には、どのような人物がいたのか、という資料を紹介します。

軍師というと、合戦の際に戦略を練り、戦鬪を有利に導くというイメージが強いと思います。しかし、戦国時代の軍師は戦略を練るだけでなく、敵軍や中立の武将に対して事前に交渉を行い、敵方になりそうな武将を味方に引き込み、合戦することなく事をおさめるということも大きな役割の一つでした。黒田官兵衛の場合は、戦略、交渉の両面でエピソードが残っています。

まず、戦略面のエピソードとして、「中国大返し」での策略が挙げられます。本能寺の変の直前まで秀吉軍は、毛利方の備中高松城を攻めていたのですが、明智光秀を討つため、急きょ、京に向かうこととなります。その際に毛利方と講和するのですが、小早川景隆からは毛利の旗を、宇喜多直家からは宇喜多の旗を黒田官兵衛は借り受けます。そして、京に向かう道中でその旗をなびかせることで、あたかも「秀吉軍に、毛利勢と宇喜多勢が加わっている」と演出しました。これによって、明智光秀につくか、豊臣秀吉につくか決めあぐねていた武将たちを一気に引き込むことに成功し、直後の山崎の戦い（天王山の戦い）において秀吉軍は勝利し、豊臣秀吉が天下を取るに至ったのです。

次に、交渉面のエピソードとしては、「小田原城の無血開城」があります。天正 18 (1590) 年、小田原城を包囲していた秀吉軍でしたが、籠城を行っていた北条氏政・氏直はなかなか音をあげません。しびれを切らした秀吉は、黒田官兵衛になんとかするようにと伝えます。そこで、官兵衛は陣中見舞いとして、酒二樽と肴として漬け鱧十尾を送りとどけました。すると北条方からは返礼として鉛と火薬が十貫目ずつ届きます。これは北条方からすれば、まだまだ物資はたくさんあるぞと挑戦的な意味合いを持たせたものですが、黒田官兵衛はこの返礼から脈があると判断し、単身丸腰で小田原城に説得に乗り込みます。そのときの説得では、北条氏政に一蹴され失敗に終わります。しかし、その数日後に、子の北条氏直が「私が一身に責任を負って自刃するので、城兵を助けてほしい。」と申し出るのです。残念なことに、この時の黒田官兵衛の説得内容は伝わってはいませんが、黒田官兵衛の説得によって、北条氏直の心が動かされたのは間違いありません。

名前の豆知識② 諱 (いみな)

本名(ほんみょう)を、その死後に諱(いみな)と呼ぶのが本来の意義です。しかし、実質的には同一の呼称をただ時期的に区別したもので、生前においても実名のことを一に諱と呼んでおり、人名の最も基本的な呼称のことを指します。つけられた実名(諱)を「名乗(なのり)」とも称しました。

(参考文献：『国史大辞典 1』p804)

(図書資料)

- 『軍師・参謀（中公新書 977）』
（小和田哲男／著 中央公論社 1990）[210.4/ダ]
『軍師と家老（中公文庫 す17-4）』
（鈴木亨／著 中央公論新社 1999）[B281/ケン]
『「軍師」の研究（PHP文庫 モ-31）』
（百瀬明治／著 PHP研究所 1986）[B281/ケン]
『戦国参謀』（佐々克明／著 産業能率大学出版部 1980）[210.4/セ]
『戦国の参謀たち』（小和田哲男／著 実業之日本社 1992）[28/セン]
『戦国の武将三十人』（桑田忠親／著 新人物往来社 1996）[20/セン]
『戦国武将逸話集 続』（湯浅常山／原著 勉誠出版 2011）[281/セン]
『戦国名将に学ぶ勝ち残りの戦略』（風巻絃一／著 日本文芸社 1979）[210.4/セ]
『敗者の条件（中公新書 62）』（会田雄次／著 中央公論社 1984）[210.4/ハ]
『反逆の日本史』（原田伴彦／著 時事通信社 1979）[210.1/ハ]
『秀吉家臣団』
（大坂城天守閣／編 大阪城天守閣特別事業委員会 2000）[210.48/ヒテ]
『豊臣秀吉事典』（杉山博／〔ほか〕編 新人物往来社 1990）[289.1/ト]
『原田伴彦著作集 6』（原田伴彦／著 思文閣出版 1982）[210.1/ハ]
『日本史探訪 第6集』（海音寺潮五郎／〔ほか〕著 角川書店 1972）[210.1/ニ]
『竹中半兵衛』（池内昭一／著 新人物往来社 1988）[289.1/タ]
『竹中半兵衛のすべて』（池内昭一／編 新人物往来社 1996）[289.1/タ]
『伊達政宗と片倉小十郎』（飯田勝彦／著 新人物往来社 1987）[289.1/ダ]
『直江兼続』（矢田俊文／編 高志書院 2009）[289.1/チ002]
『直江兼続のすべて』（花ヶ前盛明／編 新人物往来社 1993）[289.1/ナ]
『山中鹿介のすべて』（米原正義／編 新人物往来社 1989）[289.1/Y34]
『山中鹿介幸盛（戦国ロマン広瀬町シリーズ 4）』
（妹尾豊三郎／編著 ハーベスト出版 1996）[289.1/ヤ]
『「山本菅助」の実像を探る』（海老沼真治／編 戎光祥出版 2013）[289.1/ヤマ279]
『軍師山本勘助』（笹本正治／著 新人物往来社 2006）[289.1/ヤマ279]
『石田三成（PHP新書 011）』
（小和田哲男／著 PHP研究所 1997）[289.1/イ030]
『石田三成（人物叢書 新装版）』（今井林太郎／著 吉川弘文館 1988）[289/イ]
『小早川隆景のすべて』
（新人物往来社／編 新人物往来社 1997）[289.1/コハ010]

(雑誌資料)

- 『一個人 2011年12月』（KKベストセラーズ）
『人物往来歴史読本 1968年3月特別号』（人物往来社）

『日本歴史 1997年8月号』（吉川弘文館）
『歴史街道 2007年9月』（PHP研究所）
『歴史街道 2009年4月』（PHP研究所）
『歴史人 2011年4月』（KKベストセラーズ）

『歴史読本 1978年8月号』(新人物往来社)
『歴史読本 1992年臨時増刊秋号』(新人物往来社)
『歴史読本 1994年10月号』(新人物往来社)
『歴史読本 2010年12月』(新人物往来社)
『歴史読本 別冊 1996年7月』(新人物往来社)
『歴史と人物 1981年6月号』(中央公論社)

3 霊名「シメオン」 ～キリシタン大名～

天正13(1585)年前後に、豊臣秀吉の命で大阪に教会ができました。官兵衛が改宗したのはちょうどこの頃だったと言われています。官兵衛の霊名(洗礼名)はシメオンと言い、改宗後は宣教師たちを保護し、布教に協力しました。

秀吉の周りには20数名のキリシタン大名がいたとされています。その中の一人に高山右近という人物がいました。黒田官兵衛とも関わりの深い人物で、官兵衛は彼の勧めで洗礼を受けています。右近は、前田利家からも「右近は、勇敢であり、力もあり、兵法に長じ、用心深く、りっぱな武将である。」(『人物中心の日本カトリック史』池田敏雄/著 サンパウロ 1998)と評されるほどの人物でした。しかし天正15(1587)年に、秀吉は伴天連追放令を發布してキリスト教を禁止してから右近の運命は大きく変わります。右近は改宗を迫られたのですが、それに応じず、領地を追放されることになってしまいます。明石十二万石の領地を追放されて父や妻子とともに流浪の身になるろうとも、信仰を捨てることはありませんでした。その後は前田利家の保護を受けて静かな余生を送っていました。しかし慶長19(1614)年に徳川家康の大禁教令により、国外追放の憂き目にあってしまいます。そしてマニラにて熱病で倒れ、63歳で非業の死を遂げました。

名前の豆知識③ 霊名

洗礼式の際に受洗者に与えられる名前で、洗礼名ともいいます。受洗者が聖徳に励む模範とするため、また保護やとりなしを願って、証聖者や殉教者などの名がつけられる場合が多いそうです。霊名は変わりませんが、呼び名としての霊名を変更するのは、堅信の秘跡や修道誓願を立てるときなどです。

(参考文献:『新カトリック大事典 III』p870)

右近も官兵衛も、同じ秀吉に仕えたキリシタン大名ですが、官兵衛は伴天連追放令が出された後も重用されています。右近は信長の死後に秀吉の部下となりましたが、官兵衛はすでに秀吉の中国遠征を支援するなど、顧問格としての立場を確保していて信頼も厚かったのです。しかし、少し立場や状況が変われば、追放されているのは官兵衛だったかもしれません。

キリシタン大名と呼ばれる彼らは、常に信仰と政治の板挟みになっていました。時の権力者次第で政治がいとも簡単に変わる時代に、変わらない信仰心を持ち続けることの難しさを伝えてくれます。

このコーナーの展示資料

(図書資料)

- 『完訳フロイス日本史 5 (豊臣秀吉篇 2) (中公文庫 S 1 5-5)』
(ルイス・フロイス/著 中央公論新社 2000) [B210.48/かん]
- 『完訳フロイス日本史 1 1 (大村純忠・有馬晴信篇 3) (中公文庫 S 1 5-1 1)』
(ルイス・フロイス/著 中央公論新社 2000) [B210.48/かん]
- 『九州のキリシタン大名』(吉永正春/著 海鳥社 2004) [198.221/キユ]
- 『キリシタン研究 第19輯』
(キリシタン文化研究会/編 吉川弘文館 1979) [198.221/キ]
- 『キリシタン大名 (教育社歴史新書 日本史)』(岡田章雄/著 1985) [198.2/キ]
- 『キリシタン大名 (日本歴史新書 2)』
(吉田小五郎/著 至文堂 1966) [198.2/ヨ]
- 『切支丹大名記』(シュタイシェン/著 大岡山書店 1930) [198/キ]
- 『日本キリシタン史の研究』(五野井隆史/著 吉川弘文館 2002) [198.221/ニホ]
- 『フロイスの見た戦国日本』(川崎桃太/著 中央公論新社 2003) [210.48/フ]
- 『高山右近 上』(鷺山千恵/著 同朋舎出版 1992) [BM913/ワシ]
- 『高山右近 下』(鷺山千恵/著 同朋舎出版 1992) [BM913/ワシ]
- 『人物中心の日本カトリック史』(池田敏雄/著 サンパウロ 1998) [198.221/シ]
- 『物語キリシタン大名の妻たち』
(新人物往来社/編 新人物往来社 1991) [BM913/シ]

4 号「如水」 ～その晩年～

天正17年(1589年)、黒田官兵衛は家督を長男の長政に譲ります。そして文禄2年(1593年)に剃髪して、如水軒円清と号しました。しかし、その後も秀吉に従い、小田原攻めで北条氏直の降伏に尽力し、朝鮮出兵にも参加しています。

また、如水と改めたころから茶室にも参席するようになりました。当初官兵衛は、茶の湯は無刀となり、狭い茶室に坐るため無用心この上ないと嘲笑していました。しかし、ある日秀吉から茶会に招かれたことがあり、主命は辞しがたいと渋々茶室に入りました。すると、秀吉以外誰もいません。秀吉から、茶室以外の場所で密議を交わしたならば、人から疑惑を持たれることになるかと告げられます。そこで官兵衛は破顔一笑し、感心しました。それ以来、茶の湯に興味を持ち稽古に励んだということです。

名前の豆知識④ 号

人名呼称法の一つ。実名に対して称えられる字(あざな)とは別につけて用いられました。他人によって称せられる家号(閑院・染殿など)・綽号(しゃくごう・あだな、悪左府など)と区別して、当人がみずから称するものをいいます。日本では、鎌倉時代以後に主に禅僧によって移入されて次第に定着し、室町時代には公家・武家の間でも別号の称が広く行われました。

(参考文献:『国史大辞典 5』p275)

官兵衛の教訓には、「家を定め国を治める」といった点に重きをおいたものが多いようです。家臣相互間の和合に深く心を用い、家来たちの人柄や性格、家来同士の仲の良し悪しを記載した覚帳「家中間善悪乃帳」を駆使していたそうです。長政に家督を譲った際は、国を治める心得を説き、「その身の行儀を正しくし、理非賞罰を明らかにすべきである。そうすれば自然と威厳が備わる」と戒めたそうです。

慶長9（1604）年3月20日、伏見において病死。黒田官兵衛は、13万石という小禄で59年の人生に幕を下ろしました。

このコーナーの展示資料

（図書資料）

- 『黒田官兵衛・長政の野望（角川選書 531）』
（渡邊大門／著 角川学芸出版 2013）[289.1/カ]
- 『黒田軍団』（本山一城／著 宮帯出版社 2008）[210.47/カ]
- 『新修福岡市史 特別編』（福岡市史編集委員会／編 福岡市 2013）[219.1/ソ]
- 『福岡県史 近世史料編〔1〕』（西日本文化協会／編 福岡県 1982）[219.1/フ]
- 『福岡県の歴史（県史 40）』
（川添昭二／〔ほか〕著 山川出版社 1997）[219.1/フ]
- 『戦国武将と茶道（有楽選書 19）』
（桑田忠親／著 実業之日本社 1978）[791.2/ク]（久喜図書館所蔵）
- 『茶書の系譜』（筒井紘一／著 文一総合出版 1978）[791/チ]（久喜図書館所蔵）
- 『戦国大名の古文書 西日本編』（山本博文／編 柏書房 2013）[210.47/セ]
- 『戦国九州の女たち』（吉永正春／著 西日本新聞社 1997）[281.09/セ]
- 『日本思想大系 27』（家永三郎／〔ほか〕編集 岩波書店 1974）[121/ニ]
- 『武士の家訓（講談社学術文庫 1630）』
（桑田忠親／〔著〕 講談社 2003）[B156.4/フ]
- 『黒田騒動 上（教育社新書）』（原田種夫／訳 教育社 1982）[219.1/カ/1]
- 『黒田騒動 下（教育社新書）』（原田種夫／訳 教育社 1982）[219.1/カ/2]

（雑誌資料）

- 『宝島. 別冊 2120（2014年2月15日）』（宝島社）

今回紹介した資料以外にも、県立図書館では黒田官兵衛や軍師、キリシタン大名に関連する資料を所蔵しています。お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。

